

自閉症スペクトラム幼児に対する家庭支援（2）

語獲得のプロセスと安定的使用からみる家庭支援プログラムの効果についての検討

○深松 綾花

伊藤 志穂

小野里 美帆

(埼玉県立越谷西特別支援学校)

(文教大学教育学部)

KEY WORDS: 自閉症スペクトラム障害 家庭支援プログラム 言語・コミュニケーション支援

I. はじめに

本研究は、伊藤・深松・小野里（2017）による一連の研究の続編である。家庭課題を実施した ASD 幼児における語彙獲得の変化を基に、ASD 幼児における語彙獲得の特徴を分析すると共に、家庭課題提示による家庭支援の効果について検討することを目的とする。

II. 方法

- 1. 対象児及び保護者の特徴、支援期間、場所**：伊藤・深松・小野里（2017）による一連の発表（1）と同様。
- 2. 対象児（A児）についての支援目標**：①他者と関わり、事象を共有する力の拡大、②言語理解・表出の促進、と設定した。本研究では②の語の表出について報告する。
- 3. 手続き**：支援期間は10カ月、計17セッション。主たるプログラムは以下の通りである。場面設定は、A児の好きな遊びを中核とした。①ポジティブな情動の共有、アイコンタクト、予期、「やって」等要求表出を目的とした身体遊び。②自発的な音声言語の表出・音声言語の理解を目的とした認知課題や協同活動（パズル、マッチング、協同による積木つみ等）。③要求・叙述語の表出・理解を目的と言語表出を促すためのおやつ場面。以下、支援場面については、紙面の都合から、語の表出についてのみ報告する。語の表出を促すプロンプトは、A児の表出形態に応じて、遅延、単語のモデル提示（語の一部、単語、擬態語）、サインのモデル提示を行った。家庭課題については、A児の発達に即し、ことばの理解→表出という順序で課題を提示した。
- 4. 分析方法** 1) 支援場面についての分析：ビデオ再生により、語の表出形態を「無反応、ジェスチャー・擬態語・語の一部・単語の模倣または自発的な表出」に分類し、セッションごとに評価した。次に、支援した計24語について、要求、叙述（主として語のラベリング）、相互伝達系（おいしい等他者との共感）の機能に分類した。2) 家庭課題実施状況：母親が記録した家庭課題用紙の中から、ことばにより理解した語及び音声言語表出が認められた語を抽出し、指導初期（S1-6）、指導中期（S7-11）、指導後期（S12-17）の平均生起数を算出した。

III. 結果及び考察

1. 支援場面におけるA児の表出形態の変化

語の獲得経過を分類すると、A：前・後半共に表出形態に一貫性がある、B：表出形態が漸次的に高次化、C：表出形態に一貫性がない（表出機会があり、継続指導を行うと表出形態が高次化するが、表出機会がないと維持できない）D：その他というパターンが認められた。要求はタイプAが多く、言語表出における必然性の高さが関係していると考えられた。叙述・相互伝達系については、A児にとって親近性が高い語はタイプB、それ以外は、タイプCやDであった。この結果は、ASD 児は身近で興味・関心が高い語彙の獲得が早い（藤上ら、2009）という結果を支持している。表出形態に一貫性がない語に関しては、促されたり、意図的に表出する機会を設けたりしないと表出しにくいという実態があり、ASD 児における自発性の問題（千住、2012）が考えられた。一方で、ほとんどの語において、表出機会を設定することにより、非言語・言語いずれかの形態により表出できていたことから、A児においては、ことばを機能的に獲得及び使用できていた可能性も示唆される。

2. 家庭におけるA児の語彙数の変化

平均理解語彙数は、指導初期から後期にかけて漸次的に増加した。初期・中期には、表出語彙数に比べ、理解語彙数の方が、獲得数が多かったことから、A児は、理解から表出へという言語発達段階に沿って語を獲得したと考えられる。

Table 1 家庭における理解・表出語彙数の変化

	理解			表出		
	初期	中期	後期	初期	中期	後期
語彙数	17	29	27	4	15	23

(語彙数)

3. まとめ ASD児は習得した語彙が安定しづらい（中島、1991）ことが指摘されているが、A児においては、概ね、安定した表出が認められた。この要因は、理解から表出へという課題提示の順序性が適切であったこと、一連発表

(1)で報告したように、母親が知識や指導方法を習得し、指導後期にかけて様々な場面を設定して自主的に相互交渉を行ったことによる成果であると考えられる。換言すると、ASD 児が困難である般化を促進するための手続きが母親によって自発的に行われたと考えられる。指導場面においても、ASD 児が困難である叙述機能においても、表出形態の高次化や安定した使用が認められた。このことは、月2回による支援に加え、家庭課題と連動した支援による効果が考えられる。一方で、支援場面において、表出機会を設定しないと表出が安定しない語も認められた。子どもにとっての語使用の必然性や場面設定における工夫が改めて重要であることが示唆された。

(FUKAMATSU Ayaka・ITO Shiho・ONOZATO Miho)

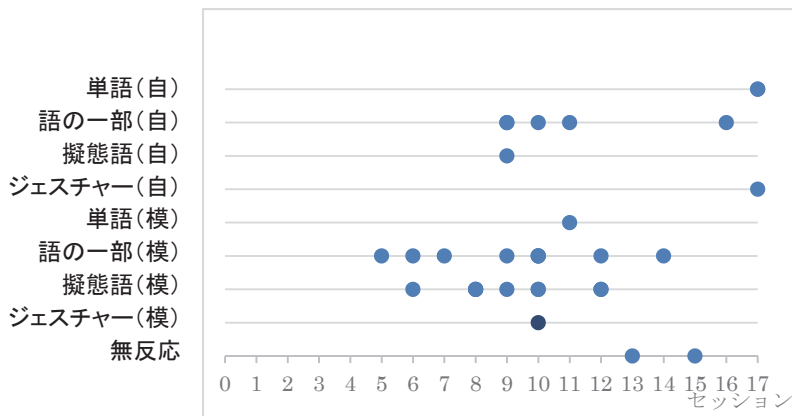


Fig. 1 叙述「りんご」についての表出形態の変化